

ドイツ語のススメー経験的外国語学習法

小澤 幸夫

1. ドイツ語との出会い

僕がドイツ語を学び始めたのは高校二年の春だった。といっても学校でドイツ語の授業があったわけではない。テレビのドイツ語講座である。

物事は最初が肝心なので、そもそもなぜ僕がドイツ語を学ぼうと思ったかをここで書いておこう。僕が物心付いた昭和30年代の始めは、ようやくテレビが出始めた頃でラジオや新聞が主なニュースソースだった。小学校に上がる前で字も読めなかった僕でも、新聞の第一面に毎日同じ人の写真が載っているのに気が付いた。母に尋ねると総理大臣だという。政治家は、皆の役にたつ偉い人だと教わったので、それからは近所の大人たちに「大きくなったら何になるの」と訊かれるたびに「総理大臣」と答えていた。

そのうちに政治家というのは悪いこともするのだということが分かり、政治家になる夢は捨てた。小学校の三年か四年の時にシュヴァイツァーや野口英世の伝記を読んで、これこそが世のために役にたつ仕事だと思い、医者になろうと決めた。この希望は中学生になっても変わらず、高校に入っても持続していたが、対数の勉強をする高校一年頃から数学が苦手になってしまい、それとともに学校の授業全般に興味を持てなくなってきた。けれども医者になろうという夢はまだ捨てていなかったもので、テレビでドイツ語の独習を始めたわけである。当時はまだ医者はドイツ語が出来なくてはいけないという考えが一般的だった。

ドイツ語を始めたのにはさらにもう一つの理由があった。中学生の時従兄が誕生日にプレゼントしてくれたシューベルトの歌曲のレコード（当時はまだLPだった）を聴いて、ドイツ語の響きの美しさに惹かれていたのである。

学校の授業と関係なく自習する語学は楽しかった。当時テレビで放送されていた外国語講座は英独仏中西露だったと思うが、ドイツ語の他にフランス語や中国語も見てみた。だがいずれも発音が難しそうなのでやめてしまった。その後大学に入ってから授業でドイツ語以外にフランス語も履修したが、これは今でもよかったと思っている。

さて当時のNHK教育TVでは、イタリア語やハングルはなかったが、その代わりドイツ語やフラ

ンス語には1回30分で週3回の時間が割り当てられていた。週2回は基礎編、1回は応用編である。僕が最初に見たのは偶然応用編で、歯医者での会話だった。キーセンテンスは“Sind Sie angemeldet?” “Nein, ich bin nicht angemeldet.” (予約はしてありますか? いいえしていません。) というものだった。文法的に説明すれば分離動詞を用いた状態受動というかなり高度な文章なのだが、不思議と今でも覚えている。けっして長い文章ではないので何度も繰り返し発音しているうちに覚えてしまったのだろう。だが2回目、3回目の授業で何を学習したかをすっかり忘れてしまったところを見ると、最初に出会ったものはそれだけ印象が強いということなのかもしれない。この頃またヘッセやハイネなどの文学を翻訳で読むようになったが、所々原文で“*Ich liebe dich!*” などというのが出てくると嬉しくなって、ますますドイツ語の勉強に身が入った。

2. ドイツ語を専攻する

さて高校生活もいよいよ三年になり、文系と理系のクラスに分かれることになった。数学だけでなく物理も苦手だった僕は、そのころになると医学部進学は無理だと考えるようになり、結局文系を選んだ。専攻は国文学にしようか独文学にしようか迷ったが、結局ドイツ文学に決めた。自分でドイツ語を勉強するのは限度があると考えたからだった。

教養課程を一年で終わると、早速専門の勉強に入った。小さな学科だったので同じ学年で独文専攻を選んだ者はたった三名、四年生まで一緒に学ぶ演習はかなりきつく、辞書を引くのが嫌になった。先生に向かって、「新しい単語を詰め込む度に、僕の中にある貴重な文芸性が一つ一つ音を立てて崩れていく気がします」などと生意気なことを言ったが、先生は怒りもせず、「単語が増えればそのうち本当の面白さが分かってくる」と笑っていた。

運のいいことに三年次からネイティブの先生が赴任され、直にドイツ語の発音にふれることができた。授業は書き取りが中心だったが、耳を鍛えるいい訓練になった。

3. ヨーロッパに行く

大学三年の夏休み、かねてからの夢だったヨーロッパに行くことにした。このために中学生の頃からお年玉などを貯めていたのだった。それでも足りないところは親が援助してくれたが、一人で行くのに反対だった。当時はまだヨーロッパに行く人もそれほど多くはなかったからだった。哲学専攻の友人を説得し、結局二人で行くことになったが、最初のフランスの一週間と、最後のドイツの一週間を除く、ザルツブルク大学での語学講習の三週間は別々に行動することにした。これは結果的にとても良かった。お互いがお互いを頼らず、自分の責任で行動したからである。

ご存知の方も多いと思うがモーツァルト生誕の地としてよく知られ、またミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台ともなったザルツブルクはドイツではなく、オーストリアにある。

ここで話される言葉はドイツ語である。

ここでドイツ語を公用語にしている国について簡単に触れておこう。まずはドイツ面積は日本の95パーセント程度の約35万7021km²で人口は8300万人ほど、ロシアを別にすれば、ヨーロッパでは一番人口の多い国である。

次にオーストリア（オーストラリアではない。「この国にはカンガルーはいません」というTシャツまで売られているところを見ると、やはり間違える人が多いのだろう）。人口（約820万人）も面積（約8万3871km²）も北海道くらい。

そしてスイス。面積4万1248km²。人口約730万人。スイスでは人口の3分の2ほどがドイツ語を用いているが、フランス語、イタリア語、レトロマン語も公用語である。

この他スイスとオーストリアの国境にあるリヒテンシュタインもドイツ語を公用語としている。なおこの国では通貨としてはスイスフランを用い、独自の通貨を発行していない。

さて、ザルツブルクの講習会は各担任による総合的な授業の他、LLを使った発音矯正の時間、ドイツ語作文の時間、歌の時間と盛り沢山だった。歌の時間は、レベルに関係なく皆で楽しめたので好評だった。またエクスカッションにザルツブルク近郊を訪ねる日帰り旅行の他、週末を利用してウィーンに行くものもあり、オーストリアの主な観光名所を回ることができた。また仲良くなった各国から来たクラスメート達と一緒にドイツのキムゼーに泳ぎにいったのも良い思い出である。ここで学んだことは、とにかく自分から積極的に人に話しかけるということだった。例えば駅での会話や、レストランでの会話のように、状況が設定されている場合、言葉が半分通じれば、意思はほとんど伝わる。言葉が三分の一通じれば、意思は半分くらいは伝わる。状況がない場合は、想像力を働かせ何とか切り抜ける。こちらが伝えたいという意志を持っていれば、相手は時間を取って理解しようと努めてくれるということだった。そして発音が大切であることも改めて感じた。

南仏では休暇中のドイツ人一家と知り合いになった。ご主人はマインツ大学の図書館に勤めているというので、講習会の後マインツまで訪ねていったら、とても歓待してくれ三日もお世話になった。その間娘さんが勤めている幼稚園にも遊びに行き、日本の歌を歌ったり、折り紙を折ったりして見せた。当時はまだ街で日本人の姿を見かけることは珍しかったので、子供たちはまるで火星人が来たかのようにびっくりしていたとのことである。

日本でも広く読まれ、また上演された、マイアーフェルスター作『アルト・ハイデルベルク』でおなじみの大学都市ハイデルベルクの本屋では以前から親しんでいたヘッセの全集を買い、日本に送ってもらった。翌年卒論を書く段になり、他の作家にしようと思ったのだが、その作家の本が夏休みに入っても届かないのでヘッセにした。作品は「デーミアン」を選んだが、その理由の一つはマインツの友人がこの作品のポケット版をプレゼントしてくれたからだった。ヘッセとの付き合いは今でも続き、「デーミアン」についても何度か論文を書き、ヘッセ全集では翻訳まで担当したので、この時の出会いはその意味でも貴重なものとなった。

4. 語学番組の活用

さて、まだまだ書きたいことは山ほどあるのだが、紙数も限られているので、外国語学習の話に戻ろう。言うまでもなく外国語を学習するにはその国に行くのが一番である。しかも若ければ若いほどよい。けれども誰にでもそれが可能なわけではない。次善策としてはテレビや映画の活用である。ただABCも分からずにテレビや映画を観ていてもそれほど能率的とは言えないので、まずはNHKテレビの語学講座を観ることを勧める。残念なことに最近では英語以外の外国語講座の番組は週に一回しか放映されなくなったので、これだけで外国語をマスターするというわけにはいかないが、一回25分という限られた時間でいろいろ工夫を凝らして作られているので、退屈しないで学ぶことが出来る。またラジオは15分であるが、月から金まで毎日放送しているので、毎回欠かさず3年間も続ければ、旅行会話などは難なくできるようになる。要はやるかやらないかである。その際モチベーションが大切なのは言うまでもない。さらに放送大学でも語学番組をやっている。こちらは45分なのでNHKと併用すればかなり多くの時間ドイツ語に接することができる。

5. 教室での授業

以上のようなことを考慮して、実際の一年生の授業では最低週一回はLL教室を使い、ドイツで収録したDVDやビデオを観た後、20分程度の発音練習の時間を取っている。自分の発音をネイティブのものと聴き比べ、矯正できるこの練習は好評である。学生が練習をしている間、教師はそれをモニターし、悪いところがあれば改めるのであるが、始めのうちは学生が自分で誤りを正すのを待っている。自分で自分の間違いに気づき直すのが大切だと考えるからである。またこの時間は学生の方から教師に個人的に質問もできるので、皆の前では恥ずかしくて訊けない学生も積極的に参加でき、学生、教師の双方が、かなり充実した時間を過ごすことができる。

二年生の授業では、日本人の授業の他にドイツ人の講師による授業が加わり、かなり高度な聴き取りや会話能力を養う訓練をしている。さらにドイツ語でレポートを書く練習もする。少人数で行われるので積極的に発言するようにすれば、相当な力を身につけることができる。

6. スタディーアブロード (SA) への参加

経営学部のカリキュラムの特徴の一つにスタディーアブロードがある。国際コミュニケーションコースでは必修科目になっているが、それ以外のコースの学生でももちろん参加でき、理学部の学生も数多く履修している。ドイツ語の場合は例年ウィーン大学の夏期講習に参加することになっているが、これも授業の一環として大切なことだと考えている。昼の上やプールの中だけでなく実際に海に入って泳ぐことにより、文字通り、体で言葉を身につけるのである。この時に繰り返し学習

した発音やリスニングの力がものをいう。希望者がいれば、週末を利用して、ガイドブックに載っていないオーストリアの友人の田舎にも連れて行く。素朴な人情にふれ、温かいもてなしを受けることでいっそう勉強しようという意欲がわいてくる。学生たちを側で見ていると、日を追ってたくましく成長していくのが分かる。若い時はその土地の空気を吸うだけでも吸収するものが多いのであろう。

大学の単位と関係なく二度、三度と参加する学生もいるが、必ず良い結果を持って帰ってくる。独検（ドイツ語検定試験）や、オーストリアが世界中で実施しているドイツ語検定試験に合格し、就職してそれを活かしたり、進学して役立てたりする学生もいる。5年前から日本の企業のウィーン支店に勤務している卒業生がいる。今年もSAに行った際に会えたが、学生たちの何人かは自宅を訪ねたそうである。

このような卒業生がいることはドイツ語教師としてこの上ない喜びであるが、これを読んでいる皆さんにとってもけっして不可能なことではない。一番大切なことは最初の情熱を持ち続け、勉強を続けることである。「継続は力なり」という言葉が語学ほど当てはまるものはない。学問、芸術、スポーツ、環境に優しいライフスタイルなど、ドイツ語を通じて学ぶものは無限にある。ぜひ在学习中にドイツ語を学び、一生の財産にしてほしい。